Vol.2016-CE-137 No.8
2016/12/4

事態把握の違いを利用した語学教材の提案（3）

佐野洋[†1]

概要：言語が違うとものごと（事態）の把握や認識の仕方も違う．前稿（CE135 での報告）では、事態の把握の仕方の違いに着目した（英語）語学教材の開発事例について報告した．基本となるモノ（名詞）の概念化、とりわけ（日本人学習者には困難点として指摘される）冠詞の使い方についての教材開発事例を取りあげた．本稿では，動詞が表す事態の把握の違いと，名詞の概念化の違いから，文型が異なることを指摘し，それらの意味的な対応を示す．主語や目的語といった文法概念ではなく，事態の把握の違いに基づく基本の文の雛形について説明し，代表的な文型と、日本語と英語の文型間の対応を示し、何が異なっているのかを議論する．

キーワード：事態把握，語学教材，日英語対照，帰納学習

A Proposal for Language Teaching Materials based on the Manners of Thinking and Perceiving Events (3)

SANO, Hiroshi[†1]

Abstract: One of the main proposals by the literature reported to CE135 is to promote a clear understanding by language learners of their mother tongue and to give priority to having the learners learn to recognize differences in event structures by means of a cognition mechanism for time and space --- in an apparent attempt to improve learner's writing performance. But the report does not provide detailed information on how Japanese sentence structures actually compare with English sentence structures.

In the paper, the author asks the question of how and at what point the basic difference between archetypal forms found in sentence patterns both languages fit into expressions used for making the process and flow of thought real. The answer is to be in a way of observation with perceived structures of spatiotemporal images envisaged in describing world. With the way, underlying mechanisms for referring and denoting objects expressed in sentence patterns will be provided in the paper. The paper also will explain basic sentence patterns of the two languages.

Keywords: Perceiving Events, Language Teaching Materials, Contrastive Linguistics, Inductive Learning

1. はじめに

1.1 事態把握の違いとことばの学習

筆者は， [1]， [2]において，事態を把握する仕組みの違いを利用した語学教材の提案を行った．ポイントは，(1) 母語（日本語）の事態把握の仕方を意識させること，(2) そして外国語（英語）の事態把握の仕方と比較すること，(3) 事態を時空間表現として表すことで，外界参照を模擬する視覚的な把握や理解を通じて外国語の学習が可能になる点であった．

[1]， [2]で提案する語学教材の提示方法は，事態把握の仕方の違いに着目して，母語を強く意識させ帰納推論能力を使う学習方法の一つである．母語のことばの仕組みの気付きを明示的なものとし，無意識の意識化によって，母語以外のことばの意味を考える際に，アナロジー能力を発揮させることが特徴である．

1.2 思考とその表現

母語における思考方法や表現様式を明示的に知ることは，難しいが故に他者の意見や考えを理解する効果的な手立てである．他者に対する情報伝達にも役立つ．そうして外国語（英語）の思考方法や表現様式を，母語のそれと明快に対比して理解することは,母語における場合と同様に,外国の他者の意見や考えを的確に把握することにつながり,同時に,外国の他者へ齟齬なく意見を伝えることにもなる．

本稿が提案する語学教材の特徴は，従来の「英語の考えがこうだ」ではなく,「日本語の考えがこうである．その上で対比・対照して英語の考えがこうだ」と説いて理解させようとする．外国語（英語）の仕組みだけでなく，対応する母語の仕組みも含めて説明を施す．学習領域が英語領域の領域知識だけでなく日本語領域の領域知識も含まれるのである．母語に関する知識なので，そのことに明解に気付くことで学習が自ずと進む．

1.3 思考と個別言語の表現

野矢は,「他者の思考」([3]:216 頁）についての論述で，テレパシーを例に挙げて，言語以前の無垢の思考について考察し，言語に依存しない思考の存在に疑義を唱え,「思考は言語とともにある．いや，もっと強く思考は言語におい

†1 東京外国語大学　言語文化学部/大学院総合国際学研究院
Tokyo University of Foreign Studies

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

てある，というべきだろう.」（ [3]:218 頁）と述べている．[4]でも「すべての人間は基本的に思考方法を同じくしている」という見方に対して反論をし，「文化的差異が言語の深いところで言語に反映されている.」こと，さらに「母語がものの見方や外界を知覚するやり方に影響しうる具体的証拠が，信頼すべき科学研究によって積み上げられていること」（ [4]：14 頁）を主張している．

前稿 [1]， [2]では，出来事（用言と動詞）についての具体的な教材事例，並びにモノ（名詞）の具体的な教材事例を示した．本稿では，いわゆる文型について説明し，対応関係を教材事例として示す．

なお，本稿の 3 章の内容は，TC シンポジウム 2016・パネルディスカッション（パ 03）aの資料（10 頁～13 頁）の内容に加筆し，修正したものである．

2. 事態と思考

2.1 時間は流れない

「時間が流れる」という我々の常識的な意識は，現実（の物理）世界の事実ではない.「われわれは時間が流れる，あるいは過ぎていくのを体験しない．われわれが体験しているのは，われわれの現在の知覚と，現在の記憶のなかにある過去の知覚との違いである.（ [5]:231 頁)」という． [6]で紹介したように我々は，出来事同士を「原因と結果」として説明するときには，動いている現在（主観的な時間の流れ）を用いて考えていると指摘している（ [5]). 大森（ [7]）も,「時間は静態的な座標軸であって,運動は何の縁もない．時間とは過去と未来のみを含む時間順序の座標なのである．いっぽう運動とは現在経験に固有な現象なのである.」（ [7]：79 頁）と述べている．さらに大森は「例えば，現在は時間がたつにつれて過去になる，このそれ自身は経験的に全く正しい事実を，だから現在は過去へ漸次移動してゆくのだと曲解してしまう.」（ [7]：89 頁）と説明する．

このように，我々が意識する主観的な時間認識は，エピソード記憶と関係する意識内で創造された概念存在なのだろう（ [8]). 主観的な時間の流れは常に脳内のシミュレーションによって行われる意識の産物として扱う範疇のものである．文法組織も意識の産物である．例えば，運動を表象する動詞の現在形や過去形とは，実用を旨として社会的合意の下で作られた概念だ．時間は流れないのだから，時制やアスペクトは時間根拠があって作られたわけでない．

2.2 現在経験とその把握

我々が意識する時間認識は何か.「時間は意志に属す.」と九鬼は言い切る（ [9]：9 頁). 九鬼は，フランスの哲学者，ギュヨーb等を引いて「時間とは意志とその目的との隔たり」と捉えていることを説明し，それに対して東洋的な時間の解釈は「何よりも輪廻の時間が重要であると思われる.」（ [9]：9 頁）と主張している．おそらく超時間を前提とする瞬間という意味だと考えられる．

では，直感経験としての今（現在）はどのようなものか．大森によると現在という概念は図 1 のようになるという（ [7]：100 頁).

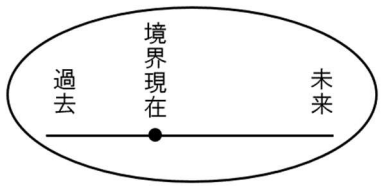

図 1 現在

「過去と未来の時間順序は現在の思考経験のなかで思われている」（ [7]：101 頁）と説明する．さらに「運動は経験にのみ帰属するのであって，過去と未来は運動とは無関係である.」と指摘する（同）．なお，境界現在とは「過去と未来とからなる時間軸上に何とか定位される」（ [7]：100 頁）点である．時間順序の軸としての過去と未来とは，現在は明確に区別すべきことを主張している．

事実，いわゆる動詞を顧みると，現在経験としての表層表現は，例えば，表 1 のようである．

表 1

現在経験としての表層表現	辞書形	テンス・アスペクト解釈
「指す」	指す	ル形（指そうと意図する）
「歩いている」	歩く	テイル形
「食べている」	食べる	テイル形
「来た」	来る	タ形
「腐っている」「腐った」	腐る	テイル形，タ形
「知っている」	知る	テイル形
「出た」	出る	タ形

知覚される現在の様々な運動（動作・行為）をお互いに認識可能なシンボルとするには道具が必要だ．その一つが言語だろう．そしてコミュニティ規模が大きくなれば，意志疎通の規則化のため，表現（シンボル）を組織化・体系化する必要がある．用言（動詞）についていうと，日本語ではル形（-u）に揃えている．そして組織化されたル形（仮想の現在時間）の事態を小さい時空間として捉えるように取り決めているc.

英語では，例えば，表 1 で取りあげた語彙に対応させると表 2 となるd.

表 2

現在経験として	辞書形	テンス・アスペクト解釈

a http://www.jtca.org/symposium/ (2016/11/4 アクセス)
b Jean-Marie Guyau（ [16]）
c 超時間と前提とする瞬間の時間解釈を基に、動作・行為として取り掛かりの意味（始動相）に固定したのだろう．
d 表層表現については、イギリスからの留学生に確認をした．

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

の表層表現		
“points”, “is pointing”	to point	現在形，進行形（「指している」ような結果状態）
“walking”	to walk	現在分詞形
“eating”	to eat	現在分詞形
“is coming”	to come	進行形
“rotting”	to rot	現在分詞形（形容詞 rotten も用いる）
“know”	to know	現在形
“appeared”	to appear	過去形

英語では不定形に揃えている．そして組織化された不定形の事態を大きい時空間として捉えるように取り決めているe．ついでながら，想起経験や想像経験と現在経験を近接させて，運動（動作や行為）を表象化して認知することから，過去形や未来形などの時制やアスペクト表現を作りだしたと推測できる．

2.3 事態表現の雛形

日本語と英語の間には事態把握の様式に違いがある．大掴みには以下である（表 3）．

表 3 事態把握の違い

	現在時間（の選好）	モノ（の見方の選好）
日本語	超時間，瞬間	機能・役割
英語	時間推移（状態変化）	存在

日本語母語話者が第二言語として英語を学習する際，上述の違い（の大きな点）が，解釈誤りや産出誤りとして顕在化する．

英語では，前置詞（from, for, to）の機能は「時間推移（状態変化）」で理解することができる．それに対して，日本語の助詞は「超時間，瞬間」を基に機能する．これらの違いに言及することで，ある程度，学習者の犯す誤りを説明できる．例えば，以下のような例である（いずれもfから引用した）．

例 “*In addition, I made a key chain using the wood in the forest.”（「それに，森の木でキーホルダーも作った．」）
⇒ “in the forest”は，“from the forest”が正しい．

例 “*They often attach the greatest importance to a person’s results of high school.”（「通常，高校の成績が最も重要視される．」）
⇒ “of high school”は，“from high school”が正しい．

前者は，「木（木材）が森に在る」ことを先行事象として，「それら木材を用いてキーホルダーを作る」ことを主事象で表している．木（木材）が両事象で共有されている．後者は，「成績に基づいて評価される」ことを先行事象として，「成績は高校で試験を受けて得る」ことを主事象とする．成績が両事象で共有されている．from は時間推移においてモノの関与の間接性を表している．つまり「高校で試験を受けて得た試験」が必ず評価に使われるわけでないのである．

これに対して to はモノの関与の直接性を表現する．to の用法については，意味上の主語や目的語を表したり，原因や理由を表す節表現として，（日本語母語話者にとって）学習インパクトが強いことから身近なのだが，このように from や for も同じような機能を持つ．間接性所以で用法が少ないだけである．

モノ（の見方）の日英語の違いについては，教材事例も含めて前稿（ [2]）を参照されたい．英語では，表現する名詞の文法振る舞いが「存在」の解釈に依存している．不定冠詞や複数形がある所以で，さらに at/on/in などの空間配置を指定する前置詞がある理由である．それに対して，日本語の体言（名詞）は「機能，役割」を選好して解釈する．これらの違いに言及することで，教材の改善ができる．

なお，文の意味表現で用いられる形式表現である述語構造（predicate structure）は，世界知識を表すのに便利な表現である．対象（objects）を存在物と見做し，存在物間の関係を述語で表現する．述語の連鎖（and）を，超時間関係として解釈することもできるが，同時に，時間の経過(and then)として，解釈することもできる．

日本語の意味分析では，述語構造も用いられるが，依存構造（dependency structure）も好まれる．依存構造では，対象（object）は機能・役割を表すモノとして解釈されることや，語順が自由であることも説明できる利点がある．おそらく直観的に，日本語では事象解釈が「超時間，瞬間」的であることを認識しているのだろう．

文法とは，思考を表出したり，相手とコミュニケーションを行うための概念形式の実用性を旨と（再利用性と簡潔性を重視）した取り決めである．次節では，「～を」と目的語が違うことを示し，日本語と英語の表現の雛形を説明する．

3. 文表現の雛形

3.1 ヲ成分と目的語

「（直線が）2 点を通る」の「2 点を」は目的語なのかどうか．動詞「通る」を活かして直訳すると“A straight line goes/passes through two points on two dimensions.” （「直線は二次元上の 2 点を通る．」）と訳せる．訳では自動詞“go/pass”を使っている．そうして，日本語の「通る，歩く，流れる」などを経路動詞と称して，これら動詞群の「～を」は，振る舞いが他動詞と異なると解釈したり，「～に」も主語用法がある（「私に（は）湖が見える．」）と日本語を分析したり

e 意志とその目的（状態）との隔たりという時間解釈を基に、動作・行為として状態が変化した意味（完了相）に固定したのだろう．
f ローレンス・ニューベリーペイトン、「日本語母語話者の誤用からみた「の」と対応する英語の前置詞」、国際日本研究センター主催・夏季セミナー2016、サマースクール院生研究発表会、東京外国語大学、2016. http://www.tufs.ac.jp/common/icjs/doc/pro-20160719.pdf

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

する例が見られる．しかし直感的には日本語の枠組みに適合していない感がある．「～を」（ヲ成分）は目的語である必要はないし，さらに「～が」（ガ成分）が，主語に対応する理由もない．

本稿では「～が」（ガ成分）と主語，「～を」（ヲ成分）と目的語を区別して，文の雛形を提案する．

- 「企業が戦略に悩む．向こうに市場が見える．これは私に分かる．」
- 「血が血管を流れる．列車が 2 番線を通過する．秘書室から向こうを見る．社員等の帰社を待った．」
- 「その年，撤退でタイを後にした．新製品に希望を託した．新天地での成功を祈る．」
- 「後輩が社長に営業成績を褒められた．ライバル社に市場を取られた．」

[6]，[10]で示し，さらに表 3 でまとめたように，日英両言語の文の雛形の構造が異なっていることが予想できる．

なお，本稿では，主語や目的語という言葉を避けて説明する．両言語を対照させる観点だけでなく，これらの術語が表す概念想起による偏向を避ける目的である．以後の説明では，主体と対象という用語を用いる．

3.2 基本の文型（日本語）

日本語は，動作・行為を解釈する際の時空間の把握規模が小さいので，その表す意味が状態表現に偏向する．状態表現を好んで用いる．体言は役割や機能をその意味として選好して表す．動作・行為の目的を推論によって目論むので，認識主体が対象を評価することが基本的な表現方法になる．基本の文型（雛形）を示す．

1. 認識主体（φ），評価対象「～が」，視点「～に」，評価述語「～する／～い／～だ」
   「企業が戦略に悩む．」
2. 認識主体（φ），対象「～が」，付随対象「～を」，非評価述語「～する」
   「我が社が情報提供の形を作る．」

言語類型論的に日本語は膠着傾向が強く（ [11]:136 頁），それが言語の仕組みに顕れている．体言の文法機能は後続する接辞で表され，そのことから「～が」や「～に」に文法特徴が顕れる．用言との依存関係の構成がポイントで，そのことから文節係り受けといった分析概念が文解釈に重要となっている．

3.3 基本の文型（英語）

英語は，動作・行為を解釈する際の時空間把握が大きいから，その表す意味が目的のある動きを選好する．名詞は存在を表すことが基本的な表現の仕方である．基本の構文を示す．

3. 認識主体（φ），行為主体（動詞前置），動作・行為（目的）（動詞），被動対象（動詞後置）（，目的状態）
   “He owned and operated a service station for many years.”（「彼は給油所を所有し，何年も営業した．」）
4. 認識主体（φ），作用主体（動詞前置），動作・行為（作用）（動詞），対象（動詞後置）（，結果状態）
   “The machine, as long as it is properly operated, will give [assure] the user a complete satisfaction.”（「機械が正しく操作されれば，使用者は完全に満足するでしょう．」）g

言語類型論的に英語は孤立傾向が強く（ [11]：131 頁），それが言語の仕組みに反映される．名詞の文法機能は動詞に前置すること，動詞に後置することで表す．持ち場（position）が要で，そのことが，語の並び（文型）と動詞を中心とする構造分析概念が文解釈に重要であることにつながっている．

なお，1～4 の文型において，認識主体は，話し手であるので文中に語形として顕れないh.

3.4 文型の違い

1 で示すように「～が」は評価対象を表し，評価述語によって価値付けられる．評価述語は形容述語や名詞述語が多いが，「驚く」「沁みる」「見える」「抗う」などの状態性の高い動詞述語もある．動詞述語が使われた際，「エコノミストが当期の決算に驚く．」のように，ガ成分（「エコノミスト」）が動詞の主体となることがある．この場合，英語の行為主体と同じような働きをする．

2 では（動作・行為を表す）非評価述語が使われ，「～が」は単なる対象である．対象ではあるが，体言（名詞）の意味として機能や役割が選好され，意味的に「作る」の主体として扱われる．「～を」は，動作・行為の付随対象である．付随対象とは，動作や行為に必然的に関わる対象である．付随対象は，動作・行為の影響を受けることもある．従ってガ成分が役割や機能として行為性を有し，且つ付随対象が動作・行為の影響を受ける場合，英語の行為主体と被動対象に対応する．

3 は典型的な英語の他動詞構文である．行為主体が動作・行為を通じて被動対象に働きかける．被動対象とは動作・行為の影響を受ける対象である．2 に大まかに対応する．存在としての行為主体は，行為を為す役割や機能を表す対象と意味的に等価である．存在としての被動対象は，影響を受ける役割や機能を表す付随対象と意味的に等価である．

4 は，意志を持たない動作・行為の主体が，作用としての動作・行為を為すことを顕す文型である．作用の対象は意味的には被動対象となる．なお，この文型に対応する日本語表現は，翻訳調の文章が増えて見かけるようにはなっ

g 中野幾雄、「動詞で決まる技術英語」、工業調査会、1991：10 頁

h φは無形、つまり表層に単語が現われないことを表す．

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

たが，本来，日本語表現として希な類である．

ヒトが，時間が流れると誤認識する要因として，できごとを互いに原因と結果として説明しているときには，動いている現在を用いて考えていると説明した．二状態の関係性を見出すヒトの能力は，因果関係理解の能力なのです．そしてヒトは，あまりに目的を探したがり，非生物の世界すら意図によって支配されていると解釈する傾向があることを説明した．この傾向が 4 の構文を生み出している．

辞書の語義を見ていると，英語の動詞の意味には，大きく分けて主語が行為主体の際の意味と，主語が作動主体の場合の意味が列挙されていることが分かる．

なお，意図性は動作・行為の理由にだけ使われるものではない．対象評価の推察の源泉でもある．日本語は，例えば「春はあけぼの（だ)」「夏はビールだ.」「ラーメンは味噌が一番だ.」などのように，「非生物の世界すら意図によって評価（共感）できる」と解釈する傾向があるといえる．

このように，非生物世界の解釈における表現の特徴が，日本語では（英語では表現できない)「～は／が～だ」に見られ，英語では（日本語では表現しない)「(無意志名詞）主語＋他動詞＋（対象）目的語」の文型で示される．

4. 文型

4.1 日本語

時空間の大きさの把握が小さいので，平面幾何的な解釈を選好する．対象の評価が基本的な文の雛形である．評価においては，モノへの視点設定がポイントで，視点は，一般知識によるもの，推論によるものなどがあり，とくに後者は，認知的なアプローチが求められ取り扱いが難しい．言語学では共感と呼ばれている概念である．共感（度）を用いて対象（モノ）を評価するのである．

1. 視点明示による対象の評価（個別的⇔永続的）
   「～が～に～だ」⇔「～は～に～だ」
2. 視点内在による対象の評価（個別的⇔永続的）
   「～が～だ」(「長い，静かだ」などの性質，属性表現）⇔「～は～だ」
3. 視点内在（従属の機能対象）（個別的⇔永続的）
   「～が～が～だ」(「神戸が港が一番だ.」）⇔「～は～が～だ」
4. 視点評価による非評価（意図的な動作・行為）
   「～が～に～する」(「警察が捜査に動く.」）
5. 視点がなく非評価（付随対象を含む）
   「～が～に～する」(「学生が学校に行く.」）
   「～が～を～する」(「学生がテストを受ける.」）
6. 視点がなく非評価で付随対象がある
   「～が～を～に～する」(「学生がペンキを壁に塗る.」）

「机，車，先生」などのように，一つのモノ（存在物）で一つの機能や役割を表す対象は（単純）対象という．モノの一部に機能や役割を認め，全体に連続したり付随したりする部分であるにも関わらず認知的な有界性を認めるモノを従属対象という．例えば,「鼻，門，スイッチ，取っ手」などである．

4.2 英語

時空間の大きさの把握が大きいので，立体幾何的な解釈を選好する．動作・行為の意図性と，意図の目的としての時間経過がポイントである．言語学では意図（性）や完了性と呼ばれている概念である．例えば，人称詞が特別な扱いを受けることが知られている（ [11]：173 頁）．

1. 時空間拡張（完了性の非明示⇔明示）
   “SVO” ⇔ “SVOC”（C は補語）
   “SVOO” ⇔ “SVOC”（C は前置詞句）
2. 時空間縮小（意図性の明示⇔非明示）
   “SVO” ⇔ “SVM”（M は修飾句）
3. 非意図行為（作用）
   “SVO” , “SVOC”, “SVM” (S は非人称（無生物）主語，V は作用を表す）
4. 意図行為で，時空間縮小（受動表現等による状態動詞化）
5. 状態動詞を使った時空間縮小（あるいは常態化）
   live, know, love, have など
6. 存在表現（恒常的な表現）
   “there is/those are”など

個別的か永続的なのかは時空間の区別（to/that）や，不定形名詞句や定形名詞句の対立で表現する．また無冠詞名詞を用いてモノに機能や役割の意味を担わせることで表現することもできる．

4.3 違い

これまで示してきたように，主語の有無とか，日本語には省略がある等といった観点では文型の違いは把握できない．前節でみたように，例えば，日本語では周辺的な表現，例えば，視点がなく非評価で付随対象を含む表現－「～が～を～する」が英語では，中核（意図的な動作・行為）の表現－“SVO”に対応している．しかも前者は,「電車が 2 番線を通過する.」といった表現も含むので，英語表現の目的語（被動対象）と非対応になる．

日本語で,「～が～だ」は，中軸（但し，視点が省略される）の表現だから良く用いられる．例えば,「僕が部長/ビール/やるのだ.」の各表現に違いはない．いずれも対象に対する評価表現である．

しかしながら，英語では，状態表現が周辺的であることから，いずれも慎重に訳し分けなければならない．まずは意図的行為として「ビールを注文する，責任を負う」などの言い換えが必要である．さらに「僕が部長だ.」では，表 3 で示したように，モノの捉え方が日本語と英語で異なる

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan

ので, 英語の表現に変換する際, 存在としての部長なのか, 役割としての部長（職）なのかを意識することになる.

5. おわりに

本稿では，事態の把握の仕方の違いに着目した語学教材の提案を行った. 前稿 [1]， [2]では, 出来事（用言と動詞）についての具体的な教材事例，並びにモノ（名詞）の具体的な教材事例を示した．本稿では，いわゆる文型について説明し，対応関係を教材事例として示した.

ポイントは, (1) 母語（日本語）の事態把握の仕方を意識させること，(2) そして英語の事態把握の仕方と比較させること, (3) 事態を時空間表現として表すことで, 外界参照を模擬する視覚的な理解や把握を通じて学習ができる点であった.

本稿は，日本語と英語の事態把握の違い，その違いに依存する文の形について述べた．日本語と英語において，それぞれが中核として持つ文表現が，相互に周辺的な表現であることの不運は, 現在経験から（物理的には存在しない）捉えがたい時間の流れを認識する創意工夫の余波であって, 如何ともし難い．故に日本語の運動理解の枠組みを強く意識することと,「日本語の考えがこうである. その上で対比・対照して英語の考えがこうだ」と学習者に説いて理解させる努力が一層必要となる.

謝辞

本研究は，科学研究助成（基盤研究（A)),「大規模会話コーパスに基づくラーニングマイニングの深化とテーラーメイド日本語教育」（研究代表者：芝野耕司）の支援を受けている．本研究は，科学研究助成（基盤研究（B)),「大規模会話コーパスの FS2vec 処理による CEFR Can-do 言語教材の開発」（研究代表者：望月源）の支援を受けている．本研究は,「日本語マニュアルの会」iの議論を基にしている.

参考文献

[1] 佐野洋，“事態把握の違いを利用した語学教材の提案,” 情報処理学会、第 17 回 CLE・第 132 回 CE 合同研究会予稿集, 2015.

[2] 佐野洋，“事態把握の違いを利用した語学教材の提案 (2),”情報処理学会、第 135 回 CE 研究会予稿集, 2016.

[3] 野矢茂樹，心と他者，中公文庫, 2012.

[4] ガイ・ドイッチャー著、椋田直子訳，言語が違えば、世界も違って見えるわけ，株式会社インターシフト, 2012.

[5] デイヴィット・ドイッチェ著　林一訳，世界の究極理論は存在するか　多宇宙論から見た生命、進化、時間, 朝日新聞社, 1999.

[6] 佐野洋，“目的と目論み、存在と関係,” アジア太平洋機械翻訳協会, AAMT ジャーナル, No.59, 2015.

[7] 大森荘蔵，時は流れず，青土社, 1996.

[8] ペーテル・ヤーデンフォッシュ著　井上逸兵訳，ヒトはいかにして知恵者となったのか 思考の進化論，研究社, 2005.

[9] 九鬼周造著　小浜善信編，時間論，岩波書店, 2016.

[10] 佐野洋，“事柄の表現方法の違い　目論みと目的視点でみた日本語と英語の対照,” TC 協会, 2015.

[11] リンゼイ.J.ウェイリー(著)　大堀壽夫他(訳)，言語類型論入門，岩波書店, 2006.

[12] 松波謙一、船橋新太郎、桜井芳雄、久保田競編，記憶と脳，サイエンス社, 2002.

[13] 鈴木由加里，“日本におけるジャン：マリー・ギュヨーの受容について,”人文 5, 39-56，学習院大学, 2006.

i http://ngc2068.tufs.ac.jp/nihongo/htdocs/

ⓒ 2016 Information Processing Society of Japan